



千川有吾さん(左)、優衣さん(右)夫妻。栽培しているパプリカの前。右は一目で分かるように作成したロゴ

## 頑張りが形になる 達成感

**千川有吾**さん(33歳)、  
**優衣**さん(29歳)  
JA信州うえだ、長和町

長和町で昨年、独立就農した千川有吾さん、優衣さん夫妻。いずれも非農家出身だった二人が出会ったのは有吾さんの出身地、北海道。タマネギを大規模に栽培する農業法人でした。

道内の大学で農学部から大学院に進んでいた有吾さんは、就職を見据え、農業現場を体験しようと働いていました。「毎日がむしゃらに働き充実感があって」と振り返ります。

一方の優衣さんは、上田市出身。小学校時代に体験したアイガモを利用した水田耕作が印象に残り、大学は農学部を選び、山口県へ。卒業後、食品会社に就職したものの、違和感が拭えず、自分に合った農業の姿を求め、各地の農家・法人でバイト生活を送っていました。

「自分の責任で一から作物を育て、売る一頑張りが形になる達成感」。二人が描く農業の魅力です。実際に何を、どこで、つくるのか。避けたい気象や市況からの影響を和らげようと野菜に目を付け、場所は今後の子育てなどを考えて「義実家に近い方が何かと都合がいいだろう」(有吾さん)と上田市周辺を選びました。

一足先に優衣さんが地元に戻りJA信州うえだの子会社・信州うえだファームの研修生に。その後、有吾さんが合流して研修を重ね、そろって独立にこぎ着けました。二人とも長和町の認定新規就農者で、有吾さんがブロックリーダーを中心とした露地野菜、優衣さんがアスパラガスを中心とした施設野菜を担当しています。

栽培技術は実地に研修したとはいえ、自立した農家として面倒を見る、となると勝手が違うと思うこともしばしば。それでも出荷した製品を購入した消費者から反応が届くことも。デザイナーに頼んで農園の専用ロゴも作りました。最終製品まで責任を持つ理想に向けて夢を膨らませています。



アスパラガスの結束作業を見守る坂嘉代子さん(左)。右はパートナーの宮下敏文さん

## 工場勤務経験 生かし作業 改善

**坂嘉代子**さん(64歳)  
JA上伊那、駒ケ根市

「JAの指導員さんや先輩生産者の方の協力をいただき、やっと立ちどころまでになってきたんです」

謙虚に語る坂嘉代子さん。40年近く、地元の産業機器メーカーとその関連工場で管理職まで務めた末、還暦前に転職しました。6年目ですが、今やJA上伊那管内のアスパラガス生産者で、反収ペースでも出荷ペースでも3本指に入る有力農家です。

「工場ではそれぞれの作業に対して改善提案を挙げ、効率化していきます。農業もその要領です。例えばアスパラガスのハウスの幅は2メートル40センチに対してドアは幅1メートルほど。そのままでは幅がある堆肥まき機が入らないので、支柱を簡単に外せる構造にしていちいち分解する手間を省きました。毎年付け替える倒れ止めは、そのままにすることで効率化しました。引っ掛かりを感じたところはどンドン手を入れて直したんです」

実父が存命中は兼業で60アールほどの農地でコメを作っていました。しかし、コメは価格の低落が続いています。そのまま受け継ぐだけでは心もとない状況でした。坂さんは「JAに相談に行きました。花と野菜を勧められ、支援制度の厚いアスパラガスを選んだのです」とさり。

決断の背景には工場の先輩で、農業に目を向けるきっかけを作ってくれた宮下敏文さんの存在もありました。宮下さんは現在も、共に農作業に取り組む心強いパートナーです。

「現在、世間で言われているスマート農業は、個人の生産者にはとても手が出せない価格の機器が必要です。私が目指すのは低コストでできるスマート農業です。そのための作業改善で、野菜と向き合い、よく観察、研究して、少しでも高い品質の野菜を栽培できるようにしたい。生涯続く学習だと思っています」



スタート台と位置付けたキュウリ畑の世話をする安田徳治さん

## 「一生現役」に 魅せられて

**安田徳治**さん(50歳)  
JAみなみ信州、豊丘村

「農業の最大の魅力は一生現役でいられることではないでしょうか。この辺りでは90歳のおじいさんが普通に働いています。50歳になったばかりの私なんて若造ですよ。新鮮ですね」

そう言う安田徳治さんは、小牧市で自動車整備関係の仕事に就いていました。発端は息子さんの高校進学に向けて将来像を話し合ったことでした。

「中学3年の夏前、親子を交えた面談があるでしょう。当時、息子はナガノパブルとシャインマスカットが気に入り、自分で、ためていたお年玉で取り寄せるほど。将来的に就農も考えていた矢先、妻(由貴さん)が新規就農者向けの説明会の開催を聞きつけてきて家族で参加することになりました」

会場への送り迎えを担当する運転手感覚で付き合った安田さんですが、説明を聞いていたうちに安田さん自身がどンドン引かれていったと言います。家族総出で作業に当たる農業の働き方も安田さんと由貴さんの心をつかんだ魅力で、帰りの車中では、早くも会社を辞めて就農する決断をしていたそうです。

具体的には、JAみなみ信州が管内14市町村と連携して取り組んでいる「南信州・担い手就農プロデュース」事業の南信州担い手就農研修制度を活用しました。2019年、豊丘村に移住し、同村の地域おこし協力隊員(農業研修生)になると同時に、同JAの子会社が運営する研修制度の2期生として2年間、栽培技術の習得に当たりました。

昨年(21年)独立。研修中に学んだ夏秋キュウリと市田柿の栽培に励んでいます。将来家族で描いている農業経営に向け、モモとブドウの苗木も植えました。「農業は大変なこともあるけど、やりがいがある。日々充実していますよ」と笑顔が絶えません。

# 新規就農 農 業

私たちが  
選んだ

新型コロナウイルスのまん延による世界的な物流網の寸断や、ロシアのウクライナ侵攻に伴う制裁の影響で食料供給に対する懸念が高まっています。一方で地域では担い手の高齢化で耕作ができなくなる農地が目立ち、新たな耕作者が強く求められています。農業という職業を選択、独立間もない人々を各地のJAに訪ねました。20代から60代まで、幅広い背景の一端を紹介します。



苗から成園に育てたリンゴ園を見る石丸哲広さん

## 5年目、前向きに 転機の自覚

**石丸哲広**さん(42歳)  
JA松本ハイランド、松本市

奈良県出身でテレビマンを目指して上京したという石丸哲広さん。野鳥撮影機材の製造販売を手掛ける妻・絵里さんの実家で働いていたものの、後を継ぐほどには、のめり込めなかったそうです。土いじりに興味があった絵里さんの誘いで視野になかった農業に目を向けることに。都内で開かれた移住フェアでは松本ハイランドという「カッコいい名前」(石丸さん)に引かれて松本市のブースへ。市の担当者は熱心に勧める一方で、同席していた果樹農家は「大変だから絶対来るな」とも。「そう言われれば余計に行きたくなる」(同)と、会社を辞めて3ヵ月後には松本に来ていました。

選んだのは農作業の実際を知りたいと同市の支援事業を通して2日にわたりリンゴの葉摘み作業を体験した田中武彦、光太郎さん親子が住む今井地区。田中さん親子にはそのまま里親としてリンゴを中心とした果樹栽培を一から指導してもらいました。

今井地区では高齢化などで余る農地を荒廃させないため、積極的に新規就農者を受け入れる機運が高まっていたことも幸いでした。里親の信用で農地を集め、一部を就農者に回すことで最初から本格的な経営を学べる態勢になっていました。石丸さんも1年目から30アールのリンゴの成園を借りることができました。ただし、昼間は里親の畑で指導を受け、自分の畑の作業はその後に。振り返ると驚くほどハードな研修期間でした。

研修3年目に形の上では独立。5年目の現在は、リンゴを中心にナシ、ブドウ計2ヘクタールを耕しています。移住前2人だった子どもは3人に。知人もなく当初はとまどっていた絵里さんも農園の商品企画に携わるなど手応えを感じるように。充実感の一方で「転機を自覚している」と言います。



自宅近くに確保したメインのレタス畑に立つ遠藤清和さん

## 独立起業の夢、 農業で着々

**遠藤清和**さん(45歳)  
JA洗馬、塩尻市

生まれも育ちも東京都という遠藤清和さん。大学を卒業してシステムエンジニアとして入社した都内の会社に勤めて16年余。40歳を迎えるころ、組織の一員としてサラリーマン生活を終えることに疑問を持ち始めたと言います。

「自然に携わる仕事がしたいと思い、独立して起業するなら農業の可能性が一番大きいと感じていました」。そこで都内で開かれた就農フェアに参加。出会ったJA洗馬の縁で2017年、塩尻市に移住。同JAの野菜生産子会社「ドリームファーム洗馬」に就職し、実際に生産技術を学び、のれん分けの形で20年に独立しました。

同JAの主産であるレタスを中心にキャベツ、ハクサイなど露地物の野菜を幅広く手掛けています。

1ヘクタールほどの畑で、一人でどこまでできるか試した1年目。収穫はあったものの、折からのコロナ禍で外食需要が消えるなど野菜の価格は低迷し、収支は「散々」の結果に。それでもパートを3人確保し臨んだ2年目は「まあまあ」の出来。同じ態勢で3ヘクタールまで拡大した3年目の今年は、市場価格を意識した出荷を心掛け、より収支を改善しました。来年は新卒でフルタイムの従業員を確保。法人化など、さらなる飛躍に向けて着々と布石を打っています。

「正直な話、サラリーマン時代に比べたら現在の収入は「まだまだ」です。それでも、いずれはやり方によっては農業でも稼げることを示したいと思っています。そうでなければ、農業に人を呼び込むことはできないのでは」

人生のかじを自らの手に取り戻し、思い通りに作物をつくる未来を描く遠藤さん。移住直前に生まれ、洗馬で育った娘さんが興味深そうに見守っていました。



収穫に近いネギを見る阿部秀幸さん

## 家族との時間を 大切に

**阿部秀幸**さん(39歳)  
JAながの、飯山市

飯山市の阿部秀幸さんは同市出身の妻・絵美さんの祖父が同市でアスパラガスを手掛けていた縁で、農業に興味を持ち、絵美さんの実家の農地を継ぐ形で今年4月、就農しました。出身地の神奈川県で18年のサラリーマン生活を経験した末の決断でした。

前職はエレベーターやエスカレーターのメンテナンス。担当エリアの大型店では開店前や閉店後の作業もあり、不規則で早朝から深夜にわたる勤務も多かったと言います。初めての子どもが生まれ、新しい家を探す中で、里帰り出産で飯山市に来る機会があり、移住の選択肢が浮上しました。

「『よく決断しましたね』と周囲には言われますが、自分としては新しいことにチャレンジできる機会ができてよかったと思っています。同年代の仲間や先輩農家さんとのつながりができたのも心強かった点です」と阿部さん。

市の制度を利用し、JAながのの受け入れ機関となっている「ながの農花(株)」に所属して2年間の実地研修を経て就農しました。

「最初はズッキーニの栽培。今年は2回の収穫を体験しました。ネギもこのほど収穫できました。アスパラガスは来年からの出荷を目指して株の養生をしているところです。いまのところそれぞれ育てるのに精いっぱいですが、来年は売り上げや経営のことをもっと考えて栽培、出荷をしていきたいと考えています」

移住後に二人目の子どもが生まれました。「家族との時間も増え、よりいっそう仕事に力が入るようになったと思います。天候や価格に左右されますが、一から自分の手でものをつくることが農業の魅力です。これからは何でもやってやれないことはないというエクストリームでいろいろなことにチャレンジしていきます」。意欲的に語る阿部さんです。

農業を始めるには

家庭菜園や副業として趣味的にかかわる在り方から、経営者として独立し、本格的に農業を始める道まで、農業にはさまざまなスタイルがあり、受け継ぐ農地の有無や年代に応じて多くの選択肢があります。長野県の就農支援情報WEBサイト「デジタル農活信州」(<https://www.noukatsu-nagano.net/>)は県、各市町村、JA等の情報をまとめ、分かりやすく発信しています。

デジタル農活信州

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 持続可能な地域社会へ JAは取り組んでいます

JA長野県

【問い合わせ先】JA長野中央会 営農農政部  
〒380-0826 長野市北石堂町1177-3 TEL.026-236-2030 FAX.026-236-2008

いいJA! 信州  
<https://www.ijian.or.jp/>

長野県のおいしい食べ方  
公式Twitter

QRコード